

子どもの発達と家族関係に関する縦断的研究 (2)

—児童・思春期の子どもが母親に抱く対人的信頼感の形成要因—

○酒井 厚
(山梨大学)

菅原ますみ
(お茶の水女子大学)

眞榮城和美
(白百合女子大学大学院)

《目的》

児童・思春期の子どもが母親に抱く対人的信頼感の形成要因を、同時点における子どもの生得的な特徴に関する要因と環境要因の両方から検討する。

《方法》

対象者

「子どもの発達と家族関係に関する縦断的研究 (1)」と同じ対象者のうち、2000年度の調査に回答した子ども270名(男性:131、女性:137、不明:2)、母親279名を対象とした。子どもの平均年齢は13.71歳(13-15歳)、母親が43.61歳(33-54歳)であった。

調査内容

1) 子どもが母親に抱く対人的信頼感の項目

酒井(2001)による児童・思春期の子ども用信頼関係評価尺度(5項目・7件法)を使用した。この尺度では、母親との信頼関係を、「自分は母親と一緒にいる価値のある存在と思えるか(母親との信頼関係における「自己評価」)」と、「母親は自分と一緒にいる価値のある存在と思えるか(母親との信頼関係における「他者評価」)」という、子どもの2次元からの主観的評価により測定する。

2) 子どもの生得的な特徴に関する要因の項目

①抑うつ傾向尺度(村田, 1996): Birlson (1981)による子ども用抑うつ傾向尺度を使用した(18項目・3件法)。
②母親による子どもの気質・性格測定尺度(105項目・4件法): Cloninger (1993)の Temperament and Character Inventory (TCI) の就学児版を菅原他(1997)が邦訳したものをを使用した。全7特性のうち、子ども用信頼関係評価尺度と相関の認められた5特性(新奇性追求[18項目]、報酬依存[9項目]、持続[6項目]、自己志向[20項目]、協調[20項目])について検討した。

3) 環境要因の項目

①子どもによる母親の養育態度認知尺度(14項目・4件法): 菅原他(1999)によるPBI (Parker et al., 1979)の改変版を使用した。この尺度は、「養育態度の暖かさ」と、「過干渉傾向」の2つの下位尺度から構成された。
②子どもによる夫婦関係評価尺度(7項目・7件法): 夫婦関係の良さを子どもに評定させた(「お父さんは、お母さんを好きだと思いますか」など)。
③母親が子どもに抱く対人的信頼感測定尺度(6項目・4件法): 酒井(2001)による母親用子どもとの信頼関係評価尺度を使用した。この尺度は、1)の子ども用信頼関係評価尺度と同様に、子どもとの信頼関係における「自己

評価」と「他者評価」の2次元について母親が主観的な評価を行なうものであるが、今回は2つの下位尺度を合成した「総合評価」として使用した。

《結果と考察》

子どもが母親に抱く信頼感を目的変数、子どもの性差(第1段階)、生得的な特徴に関する要因(第2段階)および環境要因(第3段階)を説明変数とする階層的重回帰分析を行なった。まず、母親との信頼関係における「自己評価」を目的変数とした場合は、最終段階においても有意な影響を与えた説明変数は、「養育態度の暖かさ($\beta = .48, p < .01$)」と「夫婦関係の良さ($\beta = .16, p < .05$)」の環境要因のみであった。次に、最終段階において「他者評価」を有意に予測した説明変数は、「子どもの性差($\beta = .13, p < .05$)」、「抑うつ傾向($\beta = -.17, p < .01$)」、「新奇性追求($\beta = .14, p < .05$)」、「持続($\beta = .15, p < .05$)」、「養育態度の暖かさ($\beta = .53, p < .01$)」であった。

本研究の結果、子どもが、自分が母親と一緒にいる価値のある存在であると思えるという「自己評価」の形成に影響を与えるのは、「養育態度の暖かさ」や「夫婦関係の良さ」といった環境要因であることが示された。その一方で、子どもが母親のことを自分と一緒にいる価値のある存在と思えるという「他者評価」に対しては、「養育態度の暖かさ」といった環境要因とともに、性別、抑うつ傾向や新奇性追求(行動の触発性を示し、好奇心の旺盛さや落ち着きのなさに通じるもの)、持続(子どもの行動維持特徴を示し、我慢強くこだわりをもつような特性)といった子ども自身の生得的な特徴に関わる要因もその形成要因であることが示された。

以上から、子どもが母親に抱く対人的信頼感に関する下位概念である「自己評価」と「他者評価」の形成要因は、子どもの生得的な特徴要因と環境要因との比較からそれぞれ異なることが示された。また、本研究の「自己評価」の形成要因に関する結果からは、環境要因についての重要な示唆を与えられている。「夫婦関係の良さ」は、子どもにとって直接の環境要因というよりも親を媒介とする間接的な環境要因であり、今回使用した環境要因からは「夫婦関係の良さ」⇒「養育態度の暖かさ」という関係性も考えられる。今回は、両者を並列に扱っているが、今後は、このような環境要因間の関係性も考慮し、子どもが親に抱く対人的信頼感に影響を与える環境要因には、直接のおよび間接的に影響するものがあることを考慮した検討が必要であろう。